重鐫

日本業所紀

夏

日本紀略抄記卷之四

夏

[illegible]

素問に曰く五三月これを蕃秀と曰ふ天地氣交を萬物華榮す夜に臥し早に起き廣庭を散髮し以て意を志を生ずるを天地の生氣を養ふと為す此を順と謂ふ逆すれば則ち氣を絶つ生を伐ると為す

君の[illegible]

千金方にいはく凡そ月の日面にとがりてあぶらのなる色
人として面皮あつく癖をまして面風となるべし
又曰ク七月二日昔の時代金物をもて辛をまして
脇腹を書べし
内経にいはく夏月冷石鉄物をもて枕とし腹とする
なれば人の日と換と
書堂編にいはく夏代童子糞あり人の鼓を食べ
これをもて糞より一たるべし
金匱要略にいはく夏月香薷乃ち食べすべし
記事我靈書に牝牛白く苦蕎と食べしいはく

これを善とす

月令廣義にいはく六月より九月に至りて一切酒肉の
及水をのむべからず又夏月腎氣衰絶を有よ房色を慎べ
又いはく夏月腎氣衰絶を有よ房色を慎べ
氣を傷り毒を換ず
又いはく汗乃衣裳に透るを日小暑
出ずるを暑と出す
要書に夏月盛暑に熱有冷水にて洗
しむべし
禁ずべし又冷水にて足を洗べ

又いろく交れば暑時分に成れば生命をうばう手数とれば癈
ともし冷水を生ず 病を生ず
又曰 夏月の心胆腎衰ふ精化して水 こゝろの秋水ふるく
如凝 老保齋 七法氣を固とし 老よる勢地とくへば
脉中濇脉ちから生風果菓氷水冷湯粉粥餅蜜老食
つゝ流元 食をれば多くは秋冷より疫癘とうもの
冷水とは 沐浴して面を洗ひ髮を梳く まことの
人をして憂鬱眼睛くらく 脉脉顧望 霍乱水飲流黄
乃癖とは女子心風よ 邪ものなれば眠中ものの人伏
ちく病と揮しひの事なり 汗 体毛孔開展ちく風邪
へ入れば これと 女人として風痺石仁言法 霍温の疾
と患しむ年時 即言とるべし 亦病根
を稽のあり氣衰ふ人を樣教乃寄よ 逆ものごと
酸中 まつもこれと 思へし
孫子人のいろく交月間よ 傷法 冷水とのこ 瓜桃生冬
の酒宜くのく食しめ ものれちくをれこ秋冬 疫癘
とまつ事とまるの
交月暑よ傷くいろく 身体たれいろく 疫ものろ人 何傷
これと 疫しいこと 病よりく 薬と服すべし
又 万象 集十 六 大津 也 物喰 疫人 寿よ

石麻呂尓吾物申夏痩尓吉跡云物曾武奈伎取食

鰻鱺魚乃夏痩を治する事醫書に見えたり
よく夏痩しげのさまなと見えたり

四月

立夏は四月乃節小満も四月の中○四月は孟夏 余月 乾月 始と仲呂とも又○四月乃和名を卯月と云卯の花月ひろくゆへなりされ花月とも又を咲せりと奥義抄に見えたり

朔日 國俗今日より八月晦日まで袷を着ゆへと日くと衣更ぞいふは古人にかはらくなれり

八日 灌佛 佛生日なり灌佛といふは高僧傳に四月八日灌佛と云あり都梁香をもて青色水とし鬱金香をもて赤色水とし丘隆香をもて白色水とし附子香をもて黄色水とし安息香をもて黒色水とし佛頂に灌ぐ、これより聯建は灌佛ありて八鐶に當る小児ありしかなり朔日より今日佛に水を灌せしむる推古天皇の御宇よりはじまりしなるべし

十五日 結夏 僧侶の結夏今日よりはじまりて七月十五日にいたりて結の足を解夏と云ひ凡九十日安居といふよおす草木蟲類等をやさしむ事とおそるゝなりたゞしもと釈苑宗規に見えたり

晦日 沐浴 今月梅雨にさきだちて風呂の涌かたるゝにて蒸めたへしと

四郎原の人々とうけよ書を霧雨ふりく五月雨を
梅雨ふり出月八月ふりとく早い出これとさうひ日
し云天寿よく日ひさ出年よい屋宅と修理して
功多くれい廣古典よ定役ふ功として造作修理と
を新の時行き書とのきり四月ふ月よ多ちと無功
と云二月二月八月九月を加ゆ云十月より四月ふ
ふりとて無功ふ出し作りたう書い出月比ふ無さ出よ
修造ふ出い功多くして大たるのたりりくして又出月迄
梅雨ふくく雨梅りりあり伝よこれと和八義廣しと
よ又和のむなりしとり

六月天氣よりの時書畫等とり日に晒して五月の初
へく紙よ糊とうけとさちをくう書く梅雨の後を
とひくとれが徴そでとと月金庫よりて
衣服とん和物しりく梅雨の湿気ふりて
日よさくせへ蔚益世波ふく徴生ます
此月ふくくしさ第を塩漬ふ作へくしこ法先ほと言
てこりさ法をとて二つよりりの月よ塩とこと
入桶よ方くへ上ふ米ふもおとね五ふとして重石と
けを重くしく又第とふとくほとうり熱湯ふくひさ
脱しく乾ふく收納用り付米清よ紙くして月の迄に

たゝく解のう塩草い塩湯ひくゆしさう汁湯こゝさ
し茶へしと茶家他用うえてこゝう
此月さゆへこゝの去豆豆。大豆若わ豆。城麻。胡麻。黄豆
純陽の月生い精気を保養して気世ふしへくこゝ及
慶喜の見こゝう又此月暴怒しんと傷事すう也
これと地せい秋元瘧とう事又寒水ふく面と洗
ひすくう事といむ
交月古法丸と服せハ此月こゝり始くのむへし男林集要に
去夏を腎気丸こゝ絞し又交ハ地黄丸と服とへし
冬ハ味丸こ絞とこれ古法丸腎気丸

地黄丸ハこゝ月一地ゆり八味丸い古法丸に附ゆ肉桂と
かくこゝう又藤立商こゝ男要に加減八味丸ハ古法丸
肉桂又味ゆとかくこゝのこゝ絞こゝ
作す地黄丸生津の力ゆこゝ絞ゆ味丸より切更大
こゝ男要久しく絞こゝ絞こゝ
四月乃立候牙一螻蟻虫牙二蛭蚓出牙三王瓜生ゆ
立夏の三候なり牙四苦菜秀牙五靡草死牙
六秋枯ゆ右小満の三候なり
立夏巳午六刻十分夜四十三刻五十分小満巳又
十八刻二十分夜四十一刻四十分 月令廣義

五月 節と芒種と云中と夏至と云ふ○五月の異名 仲夏 暮春 季夏 皐月 律と難賓と云○五月の和名とさつきと云ふ一日ふつか

四日 沐浴 粽と蓑ひしへ 菖蒲粽と蓑ひしるふるもちひと用ひす 粽米とさんあくしろくし 細米ちまき 沸湯こ てあるいは又沸湯ゆくにん又うつて米とりつ米 分けてあくしろくすし 沸湯して黄ち 九ちゃ 雄 あとハ米と麻こてしてハ白くつき 三くさし又粽と蓑ひ 猶茶乃汁をく黄へしせ 月令廣義に見えたり唐代ハ端午ハ粽を食し 角粽 茭粽 角黍 百粽 粽かゆ 粽ひ粽と角ハ

又雑ぜくさ又黄角ハくさし又作の黄ハこと
ま 禅乃縄のあやくさ 武 武 武ハ色ハ糸と縄
ケ ふく 数珠のごく つ 我 國ふを ハ粽と 又
伊勢物語を人ハ ハ粽と茭 乃 又 指遠集十八乃 詞書 ハ
ち 九 ハ ゆ ハ ハ ハ 武 ハ
つ じ り ち と 角 粽 ち を 角 黍 ち ひ り 今 日 黍 ハ
明 日 粽 と 親 戚 ち 送 ハ
○菖蒲 今日 艾 菖蒲 と 屋 ハ の ち ハ 挟 び
粽 ち 角 ち 黍 ハ 乃 ハ 月 黍 艾 と ひ を ひ て ハ ハ 形 の
ち ち く ち ち ち ち ハ ち ハ ち ち

國俗艾菖蒲とのきに懸しを如何きこえぬ
弘化式に五月三日平旦に菖蒲蓬花を軒に葺
蓬とくこあるは八こ付りまけるとてそう
又搗艾り搗く五月四日五月雨寡菖蒲
やうなり搗平納そ雄乃ちのよ 五月雨
今はいへあつ先ちるを海紀そ つ物
寄り艾蓬生乃やと

五日 端午ト云又菖蒲ト云 和漢三才図会 九穀上大祿暦序 ちいく 藻 開元十六年八月
端午祭之 又宋璫の表ちいくる月惟仲秋日五 端午十ちろ月八月 解月
乃又日ちる端午と搗ちへし山月ちのと祭ちつ ちへちちと世俗
ちを月乃又日と 端午と称す 國俗今日粽とちし菖蒲酒とちし

且今日より麻の衣と為く八月晦日より紅葉
搗とて如る搗配泡ちつを搗 六月五日
ちづう泊ちを投して死と楚人これとわちを
あ此日に粽毎ち作間は中ち米と粽へちに
投てきれと為ち漢の武帝乃河出洛の歌
回といふの海濱と云りして一人為りて三
閭大夫と名乗回ち作くいく我毎年ちつう
事一人ちるち為 故郷乃ちを懐ちり去られこと都ち
故郷乃ちを懐ちれ食絶とぬとまん今ちりたちス
粽搗の為といくるのとをつくるお緑の糸とて

紙へ　これ二種を嫁婿ノ祝ニ用ゆ　又月一度宜
今日椒と食ハ此月毒ケントゝ　月令廣義ニ
し屠蘇ノ嫁名ハ女婿　これと酒くらへ屠蘇と祝ひ
ゆゑ　又赤豆　悪鬼こゝろさし　薬ハ病ち
如くこれと食ハ鬼と降伏ス　義ノ　長倍の
時病ノ根ノ　ゆゑ　の薬　に
絶なり　伝ノ　　周礼ノ風俗
ゆゑハ新蓋　いく　稲米　つゝ　汁　黄　椒
これ　酒　包裹　ゆゑ　ハ　月一度宜

包裹　多数せす　又菖蒲酒とのむ事　家内雑記ニ年
日菖蒲　乃　くし　細末　酒ニ
うゑてこれをのむ　湯気　助　年　のぶ
ゆゑ　山沢九節ノ菖蒲　菖蒲　ゆゑ
ゆゑ菖蒲酒　酒　老樹縁
○又ノ　今日　薬　菖蒲　ノ　雑
十種　こ　ゆ　色　ノ　ひ　ノ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
又世事　御膳　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ
作ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ　ノ

掛すんぶ風俗通よみ日五綵の条ともいて
賀くとかくれい岳乃及鬼と通人をして疫疫とや
ものぐるしむ一名ハ命縁一名ハ色縁一名ハ
繾綣といふと載こりて提要孫ハ小人病年ハ
雜係といふく合歓と紙ひ名脅ハ繾ハ二ハ
ものきこえ

又世俗ハ今日菖蒲湯と用ふ沐浴をすたり
掛ふ那ハ大戴禮ハ五月ハ日菖蒲ハ沐浴をあと
楚辭ハも沐芳蘭と見えて今人の菖
蒲湯と用ふ沐浴ハ

○又今日婦人女子たるハ菖蒲と形ハ挿こ又
勝ハまたハ如此とれハ病と除くと信ハ
案附雜記ハ端午乃日菖蒲艾と新てかきく形ハ
作り又ハ蒭蓋の狀ハこくしこれと第一悪ハ邪
氣と除と記せり
いつく明知是天中節旋新菖蒲要辟邪
天壽節ハ玉燕叙ハ丈虎狼

○今日京師ハ義ハ行ふく競ふあり猿友七日の祭ハ
潔齋をして動ハ二十疋朝日ハ出ハ
ろくて一二の者と云ハ

二つよりをしてり勝負乃事をして る場合あの方に楓葉
ゆりをよりおすして落くるとく葉とくれるを見るすべ
抜ける法ノ〳〵雅集とる沢抜よる抜ぬあてりハ事せくて
大方の枝ハ枝樹よのりてくゝやとをにとるこたりる弱
附よ横義をふい立ゆりをのい場れあてりに
多つるさうり枝をゝくてこひなるくくせ事ること
及ゝにるゝらに雅集ハ中ゝけこあびるんべこハよ
こふ作枝とつ沢くるの敗りさらよりをあを
ちつまるを定ことぶがこくに跳ゆ家り第りて
横ることれ家ゝあいゆちとゝ抜いゆるこくゝ沢ゝ生くゝ生よゆゝ

鳥よあり事をうしゆゆをあり又人る川中まてゝ弱り
ゆて川よとち衣裳とぬゝしてゝるこたりこひゆ
潮斎をたくゝとゝこ流して客人の縁たるよりゝ
らにるるゝす歳るをる元貴義の村民ハ社人
なゝす参りよあるれこと つ移よ他ゆ出ゆ出とこ又
私家ハ出ことを人よゆこさえ沢るゆゝ縁出とゆむ事迄
ゆゝ一ハ大間戦厳にして五日に競る弾射ハ事
ゆゝして五位以上を言ることゝ延喜式よ言せり
祝多俳諧よいくゝ五月六日ハ節天皇あやめ代ゆゝと
ゝを行ゝく武徳殿ゝ紙幸ゆりて六府弾射ハ事ゆり

五月八日伊勢人まれびとの家に来りて八寮の御門に
五番くく競る乃事なりと云今世義あるく競馬
五月五日競るとなりいにしへ乃弓射走る乃儀式なり
我を忘る文易雑録に編年日表る閑之藩柳と
おもひもよらずして今日るとなりて迷ひ
○今日山城紀伊郡淀乃里に森の森を
道とまして競るあり此神を延喜式に之を幣す
乃神社なり日本後紀に賀茂別雷神の別也
とあり乃ち文三所式内とて山城に奉る
郡郷名井上門郷也今日祭

あるひとまつりなり八老仁天皇の御宇に無元年
月来国乃山城貴布禰より宮へ移れ天皇の御代
御子の品郷主て大和軍として遠征あるへきよし宣
旨ありて三宮神に祈誓たてまつる彼の大風吹来りて大海波
をひるがへし八艘一艘ことく倒る波に沈みて
ひとりのこりくもなりひびきて出帆し
軍勢乃上陸とまりあひけるとやう郡の者又今
日蔵番のかぶと方ともくなりて出来とす
多無とたり市といふ事むりしハ蔵ニ紙くく形と

又竹潘紀松と書れ形ようこうらへ武蔵の美にてこと
俗り武木と強き刀のごとくなりて戸数を立
俗りて一の名年ハ風俗美物とものこそ
人名れ形とこそ又ようこうして業をれ
武甲書とこそ世紙とをこそ世紙閑の勢をたまこ
先くの外よりて俗の色をかぶくいろ又紙紙て
いろくの織とうたくさ書一つ者色ともこ戸数こ
たくさのこれとのがりとこ云武紙と用ることなり武ハ
ち流をかえて色と俗をなぶ一と云紙日よりあなま
て型書れ事ようれ

物もろくをろこうこれ他ろ事俗ろ業
雑紀ハいくさ清平ハ形の人天師を畫て奥
又上ふくく天師を他り丈をなく撰こ蒜と
いくく業こ門ようを又丈を採紙て人の
形に他ろつ戸のようのかてれハ義事をゆくこ
ようり 物もろくを俗ろ清平ハ形の人天師と
○今日ようのなくれろ事ハの荊楚歳時記ようの風
又日四民清ようの踏百草ようこ百草と闘一ものの微
ありとこのなせりこれハのようしくのようのこ
日本紀ハ蓼猪と云を章蓼の帳ようて百草の闘香菖
ようこれ事りといつり

又昔一男子ありて又今朝園草は宜男と云へり歌ふ
園草乃花小黄色今朝盛開百草の中にて特に香しく清
百草の中にて特に貴し　青葉に記す
五月　百病癒癒　脂　一　老の青菜　こと功十倍
せり又今朝日未出前百草と採こく汁とつき出し
不厭と和たるく併りうて清飯す一切の金疾と治
しと月令廣義に見えたり　百草と取る　藤澤清忠
草とうり牛膝を脂とつけ　伏滑
を茶とうて八毒茶かり　伏滑
○後茶草とは元祐の日なり又世よりそれ紙に
暴毒ここに五月　伏滑
百毒　百毒　元世と
五月と端午とうて紙ちとり二

を但文乃曲みたるうりうりと　伏滑
乃ちうり　伏滑
それ用へりうれとも伏滑
説　金丹　伏滑
○又今日競渡　伏滑
なるうり家財記　伏滑
石屏の詩　伏滑
榴花角黍蒓晴新　伏滑
老詩寒也陶菖艾上米門　又　あん
減榴花上湯　今日猶留風

ちなみに天痛快漢雑録

十二月　十二日竹と桜載へし　書記に十二日と竹碎
時しすに又作遅日ともいふこれ日竹とうゆ也いろ分
所に濃と赤うなり

城日　落沼

山原溪毒ふくこれと梅毒とうづく又微毒ともかきり
梅毒は本肥土に茅蕾石榴樹根たるの枝とをひ
て毒へしし月令廣義に見えたり此は茅生て
つし薔薇水梔をき女とき毒ふくこれ又奥家人物こ
をし記きを奴僕事と廣しおこたりて家事に

るし梅毒久森の中を痛快をして腐と物見
腫とはてるしもへし舊を書籍遠拾食物者と梅
新に載しる事の木茱萸よりひ墻屋を葺也人
る物腐廣し又梅毒ゆと大腫に腫毒者と腫
とれいたれる毒ありこ茱萸に見えたり但日
とへても腫へりる毒又梅毒ゆとく瘡疥を腫へ
るれ事とれし鬱と他ゆこれと用ゆ腫へ鬱し
やしく衣紙ゆるこれと用れい腫けのまてし也
梅毒ゆ入乃流絡こうして一決し鍼し解毒ゆ

ひとく開人立夜の後庚申あり日と入梅うり　芒種後壬子の第五日を出梅うり祇園社に祈雨のうり日を入梅うり　小暑の後未の日と入梅うり　又神金鑑のいとく芒種乃後壬に第五日と入梅うり　夏至乃後庚丁の日と出梅うり　又書附絵の後未の芒種乃後壬子の日と入梅うり　小暑乃後壬子の第五日と出梅うり　元祐年中いとく芒種の後酉の日と第五と入梅うすとく夏至乃後是よりしてとく夏至乃後庚午の日と出梅うり　元梅雨か入の

節乃後壬子の日を小暑乃後庚午の日と入梅うり　いとく乃後ゆうりされとうの

旧会うり　換軒常雲徽雨祈いとく後湯之後国

有雨乃後雨天晴ゆ家化学者昆風雨之

時候所有雨遠之万物日数徐別梅雨出入之節雖有

第夏之書恐之この梅雨乃後芒種乃後

此言平昌芒種後漫雨初降之日為入梅雨漫雨收

都日為出梅庶貴平甚不差矣十月漫雨之后絶也

伝之事之次第乃ごとくいとくのうり重夏間伝くいとく又月

乃中こうり十一日にあくうりあり此日不浄とゆう後不

犯淫然不食之幸湯肉日なり

梅と湯は重箱乃物に唐那人の中信氏命なり
ゆふ暮すとなし 要事とのぐくとのり 事甘
生姜 生八七十二候乃内夏乃末三候ナ生八元に
味噌にて煮汁をとるなり
夏至の日井と渡水を汲れい疫病をとやすと法氏礼紙
志よ及てこうり又夏乃後丙丁に行ふ日支海の文
とをれいたにあり 千金方に出る
六月乃祝事梅と元皮とをつり様と云義ハ出て
波ハ重ねく長 牧用ハく島物そ皮ハつき付ハく丙
丁 又梅ハ乃物を梅乃物を義なり

六月米苞を汲米ぬくし 苞ゆるハうめくす 苞
生ハ又夏乃君 拾穀乃 ぬと多く米苞にぬる生ハ石黒
六月天樋中脱ハ多 ハ月のくるゆうしめ保ハ手
又樽ハと保齋とくし 格致餘論よいくく古人 於夏恐招
宿白濁味蔬く業し 於事渡也保ハ食水二膳 西瓜 失土
之胆ハ
月令よいくく是月や日長 玉篇陽氣 死生多 是乃命 戒文必事
掩 刃毋漏 毋色毋貳 進藏法生毋殺 不節者殺 定八氣又
回是月也 ハ居 明 晦 升 渡 ハ堂 蓋樹
保ハ 猶よいくく 是月於井及深 乃中 ハ

ばかり生雞の毛とかいくさの中にとり入るるこうはい毛
雞蛋をとるこのもとにこれ毒なりとあり
此月遊とて人々力をつくし月を賞し金華原より月
ことに又蕎麥餅鯉魚雞及赤熟せしの果をつくり物すかれ
鼈と鮑魚とおれじく食べくらべて又枇杷と麋肉熟麩也
おなじく食るなるべし月令廣義にあり 千金方に猿麝の肉
と食るるなるべき又金匱要略に云月宿中の停水と
飲るなるべし魚鼈の精血にあり色とのめば癥となる
此月農人田に苗を挿べし又圃に大蒜八たねをうゑ
べし 熟はるいさとと云べし

又月の六候第一陰根生第二賜始雷第三及蓋芽
六廿五候なり第四麻角解第五蔬始雷第
六中夏生六月候なり
廿五候 二候なり
廿五候六十刻二十分夜三十九刻四十分夜五五
六十一刻三十分夜三十八刻三十分 月令廣義

六月 節と小暑と云中と大暑と云○六月の異名 季夏 暑月
徳を林鐘と云○六月の和名をあさつきと云 こがなつ月 いふと略せるなり

朔日 賜氷の節 とてつく今日氷を食るなり物をこのみ
仁徳天皇代六十二年六月に頼田大中姫宮子聞給也

よるかにかゝりて出羽ひろむ山より上る群中をとりやり
給ひしかハ廣磨と仰りしるやうなりし所かの八紘
つかへして兄を給ふに窟ありとしこそ国のみなの
ほとりに従ふ人なを出して問せ給ふに氷室なりと
申しまするの氷をハいかやうにて納むるそと問せ
給ふに答て申さく土を一丈餘り掘て茅荻をあつく
敷て其上に萱を覆てつめしをきて氷をおさむ是ハいう
やうなる大暑にも更に消ることなく夏月に用ゆと
奏しけれハ皇子山氷を仁徳帝に献しは世にはしまれハ
え給ふて叡感ありしより年ゝ此日を定日とす

かくて氷をたてまつる初なり是後より季夏ごとにこれを
納む事とし氷室とかゝれ給ひしよりあまたの世々の
丹波のおく山に氷室ありしとなん又富士山仙洞
の大内おほとより氷を献せしなり民間にハ
寒朧製せし糯をたくはへ今日食して氷とさく
らふに準す
〇こゝにかへす氷をおさむる事ハ周禮に凌人
職といふあり氷室をつかさとる官なりまた礼記
月令に季冬氷盛と云へる其とおさめ夏
にいたりて暑にかけんかためにこの氷凍出して頒賜

ワケテ猶ハ毛詩ニ二之日擊冰冲〻ニ二之日納之注云
トハ夏ノ建卯月也北陸而義冰西陸則親而出之
ヒヒ石書誌ニ伏ノ日氷井ニ浸ス氷ヲ丸ク上ニ置テ
ヲ鄭玄ノ記ニ見テ夏ノ法
六日 秋蹴ハ製ヲ取リ蹴法ハ第ヲ上ニ弾ミ
ニ記ス及ル
十六日 ハ日ハ三ツ取リ林ニ寄ル拙者ニ
ハ事祥トシテ紀ス
ノ御代ノ三月ハ吉祥ニ
ヲ取リ

所ノ名ヲ三ツ取リ
テ三月ハ吉祥ニ
ヲ吉祥トシテ
ニ事祥トシテ
ニ紀ス
ヲ又ハ
ハ時ニ三月絶
ニ成リ
ヲ食ヒ
ヲ寿ト
ノ寿ト千年
ク十七年ノ
年毎ニ

建久元年より十二年までのあるしは後鳥羽十六歳河
位をさく今日一人のことのまんまありのく後より元暦になり
元暦御後より後はさうかくされもあるはしふかくもやかの上
今様と皆の四季物語乃後よりかは人いそのへ行ふ
まかのまり御よ久しくなりまかん後のされとも近世武
江戸泉の事三年根源年中行事なとつもと深ま
あく国史なとをさうかえしまへいわりしさまこれも貴て
ひれなる子乃後のことくちりにせられ此事なるや
れ　東鏡の本意にくりけん人々終のこと

晦日　法然　此日これ月ごとの事なり　世俗晦日法会は上人

存と称との野しなると号をつけ功能乃徳のあまり天
武天皇乃御時よりもしまれり大蔵と号へ聚楽の
まく百官一同に出しとやけるくのまゆを猶以
二ゆうとそしい
これ月れおふくの称をあへるをもしせれいのち
のていふあり　とい云ふ事をとるまかくしあり法性寺
乃関白の御記にあ
御中ぶ事これつたねてあるのちとなりにより
てきたらへ深かふかとい云ふ歌を残すへしとそいより
集にいあより和歌
武和かうしまり　文選孫武書　八月晦日大祓の祝詞

をのひらをひろげ中に紙をのせ大きなる図
をかくそれ書のごとくかの夷ゑびす三月ふ月ばかりい後
いつはなかいけばやしいつよ後七月ふあるべしとて
事来給よ是をすりて又今日門口に出さ麻苧をもて
くゝり形をなし家ごとに家ごとにてかりすす
と祭りをしなり
八月十四日ふ月後彼岸とて人々こぞりて
おなじくまつりをなす中に串をたてあるこの
ものをにんじんをはなりなり夕又是ひるよりゆり後探
て実盛川のみなとにてこの月ばかりてこん

こやなどゝ人すゝ[illegible]
ゆゝ出さく月のあるたとそくらいてりさうと
六月晦日ゆうとしてとて四月いつく[illegible]
[illegible]
疑之古人六月[illegible]
作[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
九月[illegible]

夜三月九十日あるいはかくのごとく伏とは金氣伏藏日
なりはじめのゝりうるかおもとへてはまこにあよ
ちくそそ氏ゆよかたるの水生木なりこれいはゆゝ
あるうる金まるなりたゞ秋を金にしてこなの火をうる
火氣金をして金は火氣なるゆゝ庚日をよりて
うるゝは伏す庚をうるなるゆゝ三伏といふなるゆゝ後
第三庚と初伏とし第四庚を中伏とし三秋の後
第一庚を末伏と名付あれは三伏と云元四十日なるく
[illegible]

梅雨霽るゝ法書と日よ晒さんとて表
紙をとりて拵す事繩よ無くて晒をい表の拵す
天氣好日のうせを一日にて終なりくし乾う晒
一午来れば投む晒るい暴毒の多なりてやく投
込へて屋下よりるくへて襞をさよし一夜置て明
朝翌に細むに書を晒ます一度よ多晒とへの
こに暴毒のなうまとあくて多をれい赤ぬ脆ひ
使くんと用ひす書をとてなるなくう拵擦
あくい使猫しに新ちとら糸と猫ひ縄くに故の
くく拵中に細舌を毒とぬせして襞くに用へ

屋中に久しく晒さんよりかくれくく刻日に一度晒
たるの書をとりて湿るのくを生くよりを毎年久しくを也
ををいをくの書れ拵擦をの一古人を書と所よをくを也
くに尺くうもをくを色をくの表紙を表等とをよ
をを毒へよををうくに屋毒に用くに古人書の表
�毒に多く襞書と用をく襞ををくを今八七里香こ
也をり　紙をを多ハ襞れをの紙をの襞ハ多をの襞ハ襞を
紙毒の毒の紙をうて　又麝香
ハくく一はくを拵脳を風をを又をり
圖畫毒漬をを一時拵ハくの猫ハくを毛を漬をを薄武

浄はりハ紙なとのうへに墨くして縄にかけ筆にかくへきを
かくし久しく曝すへからん図画のうらをもて表
とさらすへからんひとよひとへなら紙をとつへひろうさ
たるをもち久し　軸にはゑに前をと結ひとすへし　これ又
女四さされハ袋もとめられ

道生ハ歳よハ四季月の方掛香のおよ寄
務衣服なとをまつ古くうくし書へまへ八
女こと知かひ書図衣服など久しく釘して異穴かび生ず
秘め色て八ますてよ濕気に蒸されてかびそうのるなり

甲冑武具を布かもめん布とをもひて中間もくを於日に
曝すへし久しく曝すへからすに後に収め乾気さかへ
て後墨目拭ふ袋に納へし

衣服なとも曝すへし　土用干をも久しもすへからす又黄紬紅染

紅の色ハさやうの物にて日のよ曝へからすこれを曝せても
をかるき物類ハ袷なと夏月衣乃ひて色つきなかとハ
あれの所にまひてかくはくへし　平痕あるハ枇杷のさねを
すりて細末して洗へハ去る　鴇殿自然とよく落るなり
衣梅雨にかびたる衣服なとハ梅葉を煎して洗へし
あり又居あなかに経よりて凡衣服乃垢よ汚れなく六番
疵汚れ塵と細末し蕨薬と等分に合せ茶にそそ汚れを
ひとり湯に温湯にて洗ひしてよく…
洗のくし又絹天鵞絨などの絹のけもむき
こすし又八何ほとすつを白粉と落てとすすけて洗へて浄る

あかれたる衣服とハ滑石天竺桂各等分を末して
付たる処ハ又能くしみを去りて自ら落る又
油つきたるには蛤粉を引かけ火熨斗にてこれを
のぞけばよくおちるなり又醤を用ひて洗ひてもよし漆
まけしたる衣服を洗ふには杏仁作り撒等分を合せ
研爛して洗ふ物を搗く浄く洗ひ其後又塗
洗ふ衣服とハ冷なるべくハ度又衣を洗ふ
す蒼蘭乃煮汁へ又ハ薑浦を細末して水に
入れて洗へハ白くなるなり　以上是皆衣服洗
刻ミ置たる薬種をも紙に包みかくる事をひく時

日にあてて曝へしされど渡る薬ハさらに一家ハ平に一
千金方に云く薬を乾せて日に干てかくれ薬
うたくたる家あり蔵湿用ひさる薬ハ熱気にあらし
新に箱に入れてよくよく封して用ひ湿気を防ぎて冷えの
又新しく一年を過ぎれて新しきにて気毒乃
薬をもやりとへしたとへ世人ハ薬を蔵に貯へよく保
後をとれてる薬に遠きゆへ事をいふ彼業者老人など
遠ひ病をいやし治すれハ気を蓄して収めて八分
ハぬまざるやうにして能々とたしかつ用ひ其の
めくたるの新気をよくかへ薬をへらくと皆のあく

はとうくすし重へしめられハ久しくまつてもそ
うさい見事とたゝ門人良法ゆう碁笑話是者極
羌流門昔。張繼。黄茂。月三年大ごハ時し晒されハ黄
くつの絶たりそ能ものもたくさん流るゝ
ものくすり少ちり
寒の絶もを蝗へるものハ黄くく晒とへしうすたねゝ巣し
うち絶れ者にハ晒くのゝ晒へうすたゝ
屋下の壁に絶く重へし巣とも絶はるゝくるま
ゝ月重へし巣中ことゝ人ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝ絶ゝれい者ゝ抽ゝ澤ゝ黄ゝ

独中ゝ月ゝ人ゝ立ゝ侍ゝ絶ゝ染ゝて黄ゝ澤ゝ黄ゝ絶ゝ
中と絶ゝ月ゝ中ゝ絶ゝ絶ゝ黄ゝ巣ゝ
絶へ巣ゝ絶とひゝ絶くゝ絶ゝくゝ絶ゝ絶ゝと
ゝと絶て巣ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ
沖ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ巣ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ
潛ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ
絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ
絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ
絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ
絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ
絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ絶ゝ

魚鹽食たくと井やうにつくりたてとまい塩を
月令廣義に曰ふ七月に麦を用ひうどんのてくこねく間とうけかつをつゝ沖のゆに入
五日に入て指麦麺を作りて食くしも
元禄年間に見てうどん職雲州を所 是ゆに出
と説し是い指ます
六月こ麦しらの業とそまとけい味ゆく煮て
性ものく味ゆ又ものうとつくとと能き
ぎ煮と食ふ井のゆとと麦のゆしに
ひらかとはけまけ麦しゆ麦ゆけて

酒をかくばかくとくし
六月に稲に迫ふ不ふ蔵と多く成熟し 上稲を花
不ふ多く異時 麦しゆ家取れ蔵なら穀物て
す又麦しも異新し
茶瓶と多買ふく蔵ふ
○瓶瓶とうらの法 瓶と二ふまること者
瓶内片ふ水の月八九月 塩と入一夜置とうけ
翌日ふ水ふ入ゆ ゆこくはこ瓶
又しふ和ふへうふ又 赤茶ふ麦ふ入ふ
後ふくし

○瓜を糟漬(かすつけ)にする法　世俗に奈良漬と云瓜とハ
よきのさ瓜を丸まくぬきとこゑ塩をつめて一夜
乃ちにたやすくかきまはし瓜乃片ゝこれの内に塩ハかり
砂糖を入瓜にかつくさる分量を入桶に入すくくとし汲
ひけ二夜ほど置かく取出し塩けにてあらひて塩け
乃去らく所まで日にほし　さて瓜に糟をあらためうに
世の粕に入おしへて瓜の一つをかゝぬやうにしてこれ
うへに塩を少しかけところへにてまかせん　糟ハも塩少
ましくよし　大抵(たいてい)糟一斗に塩五合ほどもまぜてよし
糟多く瓜少く其ほかにして瓜多く糟すくなく其外なし

酒の甕(たるま)よくすゝぎ瓜とはくへし瓜にかきとつくらるまゝの
まていふへし瓶の口より風ひらぬやうにあさくしてと
未よ糸くぬりめ置へし桶(おけ)をはひろき所へ瓶ハ伏せて
これにつけおくかしく桶につきハあとてまさ
るとよくそさくへし瓜ハこれくさらずけくつきさす
さいし又鉢(はち)豆萩(まきひ)あらしてを一二夜塩の一つけ置せしと
うけくけさとかし糟にてつくれハ臓(ぞう)気(き)ゑより
瓢(ひさご)萩(まきひ)かなと平(ひら)ち抱(かしこ)く置き壺(つぼ)へ滝(たき)して貯(たくは)へし
○乾瓢(かんへう)乃製法(せいほう)　ひとく人気(き)のとき　ひ焼のうちをとにはと
えりさて種(たね)の切くき切らかを去うしくつきまつして

あまり入れて浸されかして縄にかけて陰干にしたし置よ
天日すこしくハ火のごとく水に入天に乾し置汁
縄によりまきて返し鍋にひたる醤油をこゝへ合せ
煮べし 古来よりして後沸騰しつくに入合せ
色並宜しく味よろし
○塩辛瓶乃製法 瓶を大なる器に塩をつけて中にと
うきを入れて日にあてゝ乾かして後一和
こゝへ納めまるり味噌の入らに始して置き
○乾菜の法 菜をとりて干し置て海をあて
て十番の面をつけて

ふかくべし
○豇豆塩漬の法 粉とに塩ほど合せて
豇豆と共に入て漬し置く押せす
手をもってかくれるまでくべし
五月醤油 仕込て製すべし
○醤油の製法 大麦 大豆 塩 各一石 水 二石二斗
麦ハ先水を入てよく煎りて
大豆をよく煮て大豆乃くらゐ
麦の粉とまぜて一夜寝かせて入麹と
なす麹を大豆の塩と水にて一塩

一石といれ大釜にうつし煮湯を大ひしほ
しらめまとひらして[illegible]さらかとなの[illegible]
他のへるりさめてをこし他へ入よくよくかき初より
[illegible]に[illegible]を[illegible]
四[illegible]人をわり出こくてを出へいこうり流入て四十
[illegible]と入へし在[illegible]
[illegible]水八斗入[illegible]を煮て[illegible]
四[illegible]日[illegible]
こと[illegible]
[illegible]入[illegible]

作りのへ一日より九十五日[illegible]
[illegible]
味[illegible]
（ひーかの製法　大麦[illegible]
麦ハ[illegible]
と[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

とうふ一斗に八はくとうふ
○濃味納豆の製法　黒豆壱升小麦粉壱升半入黒豆
とうふを豆腐こうく煮て小麦の粉を振りかけ
水入麹をすりこみ　さて味噌を拵こまぜて
揚こへ入さて大豆麹とくさ入て拵けの内へ入
煮こく生姜山椒皮薄皮なしとこのように刻て
色とり麹一斗に塩拵けの内へ入こまぜて
とうふ壱斗に塩拵けこく　とうふを敷の内
七八日をへて味こく成ぬ成ぬ
味噌にひまを日にかけて壺に詰申べし

○又納豆の法　大豆壱升大麦壱升麹壱斗
豆腐こく煮こく煮とすこしつゝ
豆腐に拵　むしろとうけこく一夜豆腐の
上に入かゝる移こ豆こく豆腐と入水に
よ入て七日をへ豆新豆腐こん麹をそのこと
朝麻薄皮なをへ三日をへ
日をへて又拵とうけこく
○金山寺味の製法　和州金山寺の秘方也　大豆一斗
引こう皮と玄麻こく細こと
能こくこくこく洗こ一大麦と麻

乃大豆を煮て麹にしたる時、桶の底に稲
を拵置て入れ、其上に麹を入れ、其麹の上
に一日新しき藁を敷て覆ふ、是麹を
合て藁にて覆ふこと四日、合乃塩を合て桶に入れ、
一夜置明り上に藁を敷て麹を敷て見れば
麹の色黄なる色出て、桶に入れ、上に塩を
ふけ置、毎日一度宛ふる也、十日許にて後、醤油
に搾汁に取、種麹を加へ、桶に入れ、
しばらくして麹とうけ置毎日一度宛ふる也、七十日
過て用ひる、用ひるに三四十日なれば味よく成

○麦味噌の製法

麦を洗て水に浸し、蒸して合て麹を
麦に加へ、日数八日目に麹出来る
実日を晒し、七十日を経て用ひる、
たるみて泥と水と等しくなるを入れ、毎度少宜をれいの如くして
麦麹に方て麹にして、又言葉八麦を刻て加へ
うつて入れ、其上に茶碗にて言葉麹をのせ
日数を経て後、桶を撰て壇場と称し、又
海桶八竹を以て編て、底に泥と言を
塗て入れ、其上に味噌を入れ、

元刀和漢長刀雖なれども異月を愛しぬくかたへ縁まれば
花常の時をもりくるぬうてしまひ又此月を焼て
ものをつくし
長尺故世と去法　養和　本堂に二十ヶ　雄黄　別所　竹上
紙巻して巻して焼尤もよろしと雖ども居所
依義ありてもうつ又雞の骨を焼ハ牧は尤うかるれ
骨ともすべくり門魚の骨い雄黄いは牧と云又
浸薄と義流と焼てもすしと月令廣義に見え
ようつ千金月令ないの月を浸薄と取く陰年
雄黄ようも世く焼ようい牧を解と云ものつ骨

又日田中の浸薄とは昭花し仮異氏血をなくこれを
濃しつ牧一又濃すめとるるり牧食して後ものして
者ようもう焼之ものは牧と云と居所牧ようてこう
麻の葉とけるようけいなく牧とさるるう牧ものを武
毒ようもえてより和漢ハ櫨の実とはくこれをくく牧と
さるるのようかやうの例ぞるもかりの実というこの
なるつくしい古今集色の歌ぞ
なるもいやとはるうやつとはれ光日ものるう
多ものもえ　もん　焼之大米牧の法
光国　摂津　摩羅　去　鍬　雄黄　鍬　隆

○又蝕多これいまうりなくなるを教象をひてのへなかく
さい堅ちると云ふ無形を感ずること又蝕多これ
まハ青蓋乃事と腐乃事とひ移る又ちやうぶハ業と病
つゑんく庶ちまくくしと月令廣義ハ見えたり
産月乃ち世人異事ふあてく逆ち月 或遠中ちく傷
病ちく死する事ハりこれと中暍ちも暍死ちもハ傷ハ
これと霍乱とハ中ハあやまりあり山産人とハ地そひ
やまとくうしひさ世ハ邪時ハ死ちるものあり腹湯とハ
めくいそのちるをすしん腹の乃ちくあちうひへしちし
遠布ちて死し人毒ちたれあちハ腹上の塊ちを死

腑腹の乃ちハ切ちく人なしてちのハ屋世てあ子重ち
大蒜とつき蝕うし熱湯ちて送下せハ腑ちそれ後
薬ちとあちくハ乃ち天気熱ちくちく時ハ病熱力弱ちるちる
生脉散と服すしく病ちるハそ病ちく湯ちく湯ちと
湯参芪参元湯ちと服ちとしく又異月ハ参ちと服
ちちく生脉散ハ代しと方書ハ見えたり
黄芪 人参 白朮 当帰 各一分 五味 陳皮 茯苓 甘草 五味 右十味
白扁豆 各一分 五味子 五味 麦門冬 五味 麦門冬 代之
加 蓮肉 一分 米糊 一分 甘草 五味 右十味 或
薬煎

元曼樂乃所載の粉餅を作りて饗せらるるなれ
寿世保元よりくに六月朔日房勝仏条書之旨一文源氏人
ゆうくに反閉法乳母より伝し熟蜜かを進ずるくまこと
せくに風るあるて冷酒と食ふあるは暴地に置て温
暖なる酒と食物して大なる飽ることなかれ
醍醐蜜元亨よりなるこのはよりて乳母あること流るるに蜜を收
てあるるは流くに屋日事の事に水をそいい
冷樂を通て紀弁なる柘榴と月令裏義を乃元さりて
老国乃を嚼る酒事さめ用る所あると流今流るる
流くに流に低吸るるなるくに流れるくに流

月令廣義よりくに六月より桃榴の水をうるに紀土とうい果
乃原羊の書と甕くに六月に多し
秋の比鵰風吹ふくに八月くしめる物となり梅を
鄙くに茱萸乃梅を嚙くるとくに又楊梅を物し
比月粳を食くに目を賞す羊園をくに八祇園と湯の
蜜皂角醫菓菓を食くるのを乾を食に水穀
とをの犬のるを嚙の八絶元惠をなれ冷食に芋
用し冷水生破果池臓臓甜食をる食するるのなれ
風葵炒燈葵乃原味宜くあく用くし月令廣義
元亥乃る鵝瓜とる食するるなれ瓜のるを入れ

ものハ大石毒ありと用今度義まゆんをとりて又ゆるく此
事乃瓜へと報又油鍋と此ものしく金へ入し沸物動れ
咸志ゆ瓜ハ白物と合ゆ 蝶ようなる白い瓜と合しく後
白物と食しく又麝香をもよく瓜と消化すと石番
毒と食合すまハ能瓜を消して水となりて毒空
六月乃六候中一涼風至中二蟋蟀兵壁中三鷹乃
学習 大小暑乃三候 初候 桐始花中二腐草為螢中五
土潤溽暑中六大雨時行 大大暑乃三候 初候
小暑 五月節 六月中 新二十分 長三十九刻四十分 大暑 五十
八刻 新二十分 長四十一刻四十分 月令廣義

土用 又土王ともいう
春ハ木旺しなハ火旺しなハ秋ハ金旺しなハ冬ハ水旺すと
ハ木旺しなハ火旺しなハ秋ハ金旺しなハ冬ハ水旺すと
五行乃内土ハ四時に旺すと義なくして四時乃
旺を完れる位なる義なくして四時乃
初をう辰戌丑未月の末ゆ寄旺をとるの者
十八日一年をもとくく七十二日なり此七十二日とのの
うく四時乃末ゆ金水を又各七十二日づゝ分
一年をとなる故ゆ土を木と始ゆ春夏を火土
用ハ夏乃末ゆ秋の土用を土衰荒して威なり冬
乃土用ハ水と木と火乃旺するゆ旺する故土

用ゆ中に金を入れ乃ち其上に央まを置て蔵なり
の上に又一二寸くらい土を入れ其上に金を置
あり秋乃金を土よりまする事なり春は是を央金の
右あり又一案乃中央乃中央の玉 金を
さて揚くるあり乃席となれ乃ち蔵人用金あり
事なれ此は中央の玉をのきて
ところ玉はその後たまれ
[illegible]
信玄は六月十日に入日 蘇及疫疫少豆と金とハ疫疫と
醉とし今の人はくとろ事なり それハ源氏物語
乃巻まれ出るよこてねちけさやうなるよ

俗に家紋なりとやくを蔵なりとなれハ信
へ[illegible]なり[illegible]
辰乃中巻より蔵頃のいとく 芳人正月元日食五穀
小醉 鷹氣 [illegible] 也又 脇後方に元日及
人日麻を小豆を七枚を春を疫疫を消すとなり
こたるの家初のまなひ事とハ[illegible]
事と俗人おやまりて六月よりすりるや 牡蛎乃
人を見ぬく
小蕪を六月十日乃中を採そ
六月十日の日を龜とり塩を分粉を人 泥濘下

四乃入しをやまぎるゝ風をくるれつゝ弱かりやうさ
驚えたる庵人は風を無熱　忠嘉を弱小風しやく
忠嘉をまく黄てしく

日本紀略明記卷之四畢